芸文だより

第42号

令和７年３月15日

村山市芸術文化協議会

題字／齋藤　湖舟

10年の節目を祝う　アクトザール.M　感謝のつどい

記念すべき年と芸術文化の関わり

村山市芸術文化協議会会長　伊　藤　大　藏

令和六年は、村山市制施行七十周年という記念すべき年でした。式典では、映画監督の村川透氏と芸文協の顧問で書道家の齋藤湖舟氏が名誉市民の称号を授与されました。誠におめでとうございます

また、芸文協発足六十年という節目の年でもありました。私たちはこれを記念し、シンボル事業として美術館にて、「最上川展～小松均・真下慶治が愛した母なる川～」と市民会館にて「第九演奏会」を開催いたしました。美術館ではお二人の巨匠の雄大に描かれた最上川に感動を新たにした次第です。

また、二〇二四年は第九がウイーンで初演されて二〇〇年という記念すべき年でもあったのです。山響名誉指揮者の黒岩英臣氏の指揮と県内にゆかりのあるソリスト四名、そして合唱団募集に応じたむらやま「第九を歌う会」のメンバー一〇七名が参加しました。フロイデ（歓喜）で始まる合唱は、地球上のすべての人々は同胞である、分断されてしまった人々が一つになる、つまり世界の平和を願う曲でもあります。第九の精神は、「自由」「平等」「博愛」です。「歓喜の歌」はまさしく音楽の力で平和を訴える曲です。私は、演奏が終わって客席から「ブラボー」の声を聞いた途端、感動の涙を浮かべたことを一生忘れません。

この他、上部写真で紹介している「アクトザール・M感謝の集い」や芸文協各団体の工夫と力を込めた素晴らしい発表・展示が行われました。多くの市民の皆さまに足を運んでいただき本当に有り難うございました。

第九演奏会公演後、みんなで記念撮影

第九演奏会を終えて

むらやま「第九を歌う会」実行委員会

市民会館に響く第九のハーモニー

村山市制施行七十周年を記念し、十二月一日に第六十回村山市芸術祭のシンボル事業「第九演奏会」を村山市民会館大ホールで開催しました。企画は社会音楽連盟を中心に結成された『むらやま「第九を歌う会」』（伊藤大藏実行委員長）です。

今回の演奏会では指揮者に山形交響楽団名誉指揮者の黒岩英臣氏を、ソリストには地元山形に所縁のある声楽家、本市出身の齊藤智子さん（ソプラノ）をはじめ、松浦恵さん（メゾソプラノ）、宮下通さん（テノール）、鈴木集さん（バス）の四名をお迎えしました。山形交響楽団による演奏会は午後三時開演で二部構成。第一部ではベートーヴェンの「コリオラン」序曲ハ短調作品六二を、休憩を挟んだ第二部では交響曲第九番ニ短調【合唱付き】作品一二五を演奏しました。

合唱団員の募集は昨年の年明けから開始し、百名以上のご参加をいただきました。練習開始は六月。菅野年央先生の指導の下、週一回、半年間に渡り練習を重ねてきました。合唱団員のうち、三分の一ほどは未経験の方でした。非常にハードな練習でありましたが、皆さんが半年間全力で取組み、頑張ってくださったおかげで「第九演奏会」は大盛況、万雷の拍手と喝采の中で幕を閉じることができました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

村山市で最初に第九の公演を行ったのは四十年前、昭和五十九年に開催した「第九の夕べ」です。これは村山市制施行三十周年記念行事のフィナーレとして、山形交響楽団と共に市民合唱団が第九を歌うという企画でした。当時村山市に本格的な混声合唱団が

芸術文化を未来につなぐ

最上川美術館　館長　西塚裕樹

今年度、最上川美術館は開館二十周年を迎えることができました。開館当時の真下慶治記念美術館以来のべ十五万人以上の来館者に恵まれ、多くの方々に支えられ、地域にとって芸術文化の拠点として愛されてきました。

また、今年度は第六十回村山市芸術祭シンボル事業として「最上川展～小松均・真下慶治が愛した母なる川～」を開催することができました。最上川を冠した美術館にふさわしい記念展として、山形県の母なる川をテーマに描いた郷土の二人の画家（日本画家・小松均、洋画家・真下慶治）の展覧会を開催できたことは大きな意義があると考えています。

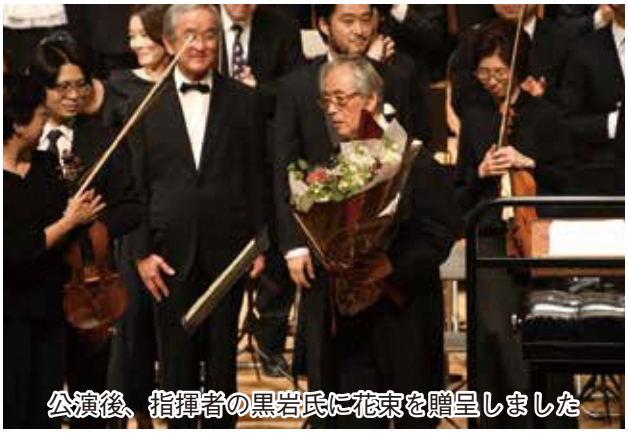
9月14日に開催されたシンポジウムの様子

令和六年九月六日（金）から十月十五日（火）までの開催期間中の来館者数は一、二〇五名と大変多くの市民の皆様に鑑賞していただくことができました。また、九月十四日（土）に開催されたシンポジウムでは、「二人の画家が描いた最上川の魅力に迫る」をテーマに作品鑑賞と画家の生涯について理解を深めることができました。講師として山形美術館副館長兼学芸部長・岡部信幸氏、大石田町立歴史民俗資料館学芸員・大谷俊継氏、最上川美術館顧問・真下清美氏、司会に同館館長西塚裕樹氏の四名によるシンポジウムは、三十名以上の参加者となり大盛況でした。

さらに九月二十八日（土）・二十九日（日）両日午前・午後の計四回開催された「アトリエ参観日」では、村山市大

ない中で、募集には実に二百名もの合唱団員が集まり、市民会館大ホールは多数の観客で超満員になりました。この「第九の夕べ」の成功から有志が集まり、村山市に混声合唱団が結成されたことは、現在に至るまでの「合唱の盛んな村山市」という特色を決定づけた出来事であったと感じます。

次に村山市芸術文化協議会設立四十周年記念芸術祭シンボル事業として「第九を歌う会」を開催したのが平成十六年十二月十二日です。「第九の夕べ」から二十年後ですが、平成五年九月に県芸文の創立三十周年事業として県民大合唱「第九を歌おう」というイベントが開催され、これに村山市芸文協も参加していましたから、体感としては約十年ぶりであったかと思われます。それ以来、村山市では村山市制施行の節目の年に芸術祭のシンボル事業として山形交響楽団と第九を歌う演奏会が、十年に一度の恒例行事となっています。


公演後、指揮者の黒岩氏に花束を贈呈しました

第九の公演には多くの合唱団員の参加と長期間の練習が必要です。大舞台でのオーケストラとの共演はたいへん得難い貴重な経験であります。普段の生活の中で、それまでかかわることのなかった人とも一緒に何か月も歌い、共に団結して向上を図り、よりよい演奏を作ってきました。重ねてきたその努力が本番ですばらしい感動を産み、次の十年の連帯を創出してきたのです。

また「第九の夕べ」の時代から合唱団員の募集には村山市民のみならず、東根、尾花沢、大石田、天童、山形など、他の自治体の合唱団や音楽経験者からも参加していただきました。他市町村の仲間との交流の広がりは、これからの芸文協の活動のあり方を見直し、改善していくきっかけになるでしょう。今回の「第九演奏会」で生まれた音楽の輪は、村山市の音楽文化の向上に大きく寄与することになると考えます。

力強い黒岩氏の指揮

淀にある真下慶治のアトリエを会場に奥様の真下清美氏から貴重なエピソードやお話を聞く会となり、眼前に広がる雄大な最上川を眺めながらの楽しい時間となりました。

村山市を流れ、山形県の母なる川・最上川を眺めることができる最上川美術館で、この記念展を開催できたことは、郷土出身の日本画、洋画二人の画家を広く紹介するばかりでなく、二人の画家の代表作をまとめて鑑賞できる大変貴重な機会となりました。時代を経てもなお二人の画家が生涯をかけて描いた最上川作品は、私たちの心に残り深く刻まれると思います。期間中、地元の中学生（葉山中三年生、楯岡中美術部）にもじっくり時間をかけて鑑賞していただいたことは、郷土愛を醸成し、芸術文化の花を咲かせ、未来を切り拓く一歩になると確信することができました。二人の画家がこよなく愛し描いた母なる川・最上川は、今もその美しく雄大な景観とともに悠久の流れをたたえています。

最後になりましたが、この記念展のために貴重な収蔵作品を快くお貸しくださった山形美術館、大石田町立歴史民俗資料館、酒田市松山文化伝承館をはじめご支援ご協力いただいた村山市芸術文化協議会、関係各位に心より深く御礼申し上げ結びといたします。

地元の中学生も鑑賞に来てくれました

真下慶治アトリエ参観で真下清美さんと懇談

第60回 村山市芸術祭

会期　令和六年九月六日～十二月十四日

第六十回村山市芸術祭は、九月六日開始の「最上川展 ～小松均・真下慶治が愛した母なる川～」を皮切りに、十二月十四日の「SKIPスーパーライブ2024」までの約三か月、村山市民会館をはじめ市内各施設に開催されました。趣向をこらしたステージや展示に訪れたお客様は、思い思いに芸術の秋を満喫していました。

晩秋を豊かに彩る秋のコンサート

津軽三味線民謡舞踊フェスティバル　朗々たる調べ

美術連盟美術展　彩り新たに

各人の自慢の作品を持ち寄り　さつき盆栽展

吟友会吟詠大会　女性たちの詩吟

からす笑劇場たそがれシリーズPart 2
「たそがれじさまのさすらいの一人旅」

生けばな展では各人の力作が並ぶ

今年の県美展では高校生の入賞が多数でした

みんなで歌おう　カラオケフェスティバル

劇団赤ひげは女性中心での公演「これからごはん」

編むあむサークル展示会
体験コーナーで一心不乱に熱中

フォトクラブと厚岸映像集団「光風」の合同写真展

文化の日に響く　プロムナードコンサート

煎茶道を楽しむ芸術祭茶会

響け未来へ

杉島諏訪太鼓保存会　加藤博行

私たち杉島諏訪太鼓保存会は令和六年十二月に結成四十周年記念公演を無事に開催することができました。ご協力していただいた皆様に感謝申し上げます。コロナ禍ということもあり、二年越しの開催となった本公演でしたが、たくさんの方からご来場いただき多くの声援のおかげで、大成功で幕を閉じることができました。

私が太鼓を始めたのは、当時特に趣味のなかった私に会長から声をかけていただいたことがきっかけでした。はじめは太鼓に興味のなかった私ですが、太鼓の練習を重ねるにつれて次第に興味がわいてきました。太鼓を続ける中で大きく変化した出来事が、東北六魂祭に山形花笠まつりで参加したことです。東日本大震災の復興を願い開催されたもので、私は福島県が初めての参加でしたが、沿道の観客の方から「来てくれてありがとう」と声をかけていただきました。それまではただ自分が楽しいだけであった太鼓が、見ている方を楽しませる、また、少しでも元気にすることができるとわかり、太鼓への気持ちが変化した出来事でありました。

杉島諏訪太鼓保存会結成四十周年のあゆみの中で、私が関わったことはほんの一部ではありますが、これからも多くの芸術・文化に触れ、未来へつなぐため努力していきたいです。

次の未来へ　40周年記念公演「響」

ファイナルまであと四回

SKIP　佐藤栄一

今年も、村山市芸術祭の最後を務めさせていただきました。雪の中、多くの皆さんに足を運んでいただき、大変ありがとうございました。

早いもので、今回で十六回目のライブとなりました。当然ながら、メンバーも年を重ね、かつてのようなパフォーマンスが難しく感じる時もあります。メンバーそれぞれが「いったい、いつまでギター片手に歌えるのだろうか……」という思いを持ちながら、今日まで活動してきました。

先日、これからの活動について話し合いました。結果、二十回目を最後のライブにすることにしました。そのことは、今回のライブ会場でも観客の皆さんにもお伝えしたところです。ラスト四回のステージに向けて、現段階で特に計画はありません。体力的には衰えても、常に向上心を忘れないのがSKIPです。年齢相応の味のある歌と演奏をお届けできればと思っています。まだご覧になったことがない方は、ぜひライブにお越しいただければと思います。

16回目のSKIPスーパーライブ

白鳥の来し徳良湖、水墨画

村山エッセイクラブ　倉金徳嗣

先日、尾花沢の徳良湖を訪ねた。うっすらと雪化粧の松林が湖面に映え、一幅の水墨画のようであった。そこには無数の白鳥がまるで小舟のように波に身をまかせていた。さしたる餌もない東北の寒地を目指して、あの広漠たる日本海を渡り来るのだ。この雪深い尾花沢もシベリアよりは凌ぎやすいのか。

なんとも、いじらしい姿だ。

エッセイクラブは同人誌『雑木林二十八号』を発刊した。

我クラブは危機を迎えている。それは会員の減少である。

新しい書き手を捜しているが、なかなか難しい。

エッセイは特別コムズカシイことをやってはいない。日常の気づきをサラッと書けばよいのだ。

俳句や短歌と同じで物事を視る『切口』が大事なのだ。

みなさん、いっしょにエッセイを書いてみませんか。

大正琴の由来、今後は

村山市大正琴連盟　後藤　敬子

大正琴は、名前の通り大正元年に日本で発明された楽器です。発明したのは名古屋の森田吾郎という人で、パソコンのキーボードに似た文字を打つ機会のタイプライターをヒントに考え出されました。

私たちは昭和五十年頃からソプラノ、アルト、テナー、ベース（オーケストラ）を楽しむようになり、平成六年村山市大正琴連盟を設立し、村山市芸文協に加盟し現在に至っております。一時は百名を超えるほどの会員がおりましたが、現在は数名になり淋しい限りです。発表会の時は他団体の友情出演なども含めて公演しています。

以前は県や東北、全国のさまざまな大会に参加していました。平成三十年には静岡県で開催された大正琴一斉演奏のギネス記録挑戦として参加者二、八六四名の一員として参加し、記録達成認定証を頂いております。

平成五年に文部科学省の認可を受けたことで大正琴は学校教育の中で教えることができるようになりました。県外では子ども達だけの演奏会も開かれています。また昨年の演奏会では男性による弓弾きも披露し好評をいただきました。

令和七年がスタートし、私たちは本年も公民館主催のふるさと演芸大会や春のバラまつりなど、市内外のさまざまなイベントに進んで出演しようと思っています。老若男女問わず誰でも弾けるようになりますので、興味のある方は大正琴連盟まで御連絡下さい。心よりお待ちしております。

誕生から百年以上の時を経て　大正琴の調べ

芸術文化功労者を表彰

村山市芸術祭開幕式の席上、令和６年度芸術文化功労者が表彰されました。誠におめでとうございます。　（10月25日市民会館）

【功労章】

大場ひろみ（楯岡・華道連盟）

【感謝状】

戸津　和美（東根・楯岡小学校合唱部）
峯田　博子（天童・楯岡小学校合唱部）
加藤　博行（東根・杉島諏訪太鼓保存会）

書道展・色紙展『自由奔放』

村山市書道会　青柳　孝雄

今年で六十回を数える芸術祭。この芸術祭と共に育てられてきた書道展。市内各地の文化祭等から始まって各々の同人展、県総合書道展、日展を始めとする中央の大きな展覧会で入選、入賞を果たされた方々の作品まで一同に会して発表し、鑑賞できる書道展です。

節目の年である今回は、通常開催では展示していない県展版のサイズの作品も多く出品され、大迫力の書を目の当たりにできたと思います。

色紙展は今回で四十六回を数えます。大きな作品の書道展と違い、誰でも気軽に書けてその雰囲気を楽しめる「色紙」に特化した書道展です。子どもから大人まで百十名、百四十三作品を展示しました。志布市長、高橋議長、菊池代議士、能登県議、出品ありがとうございました。

近年は、創意工夫を凝らしながらも優しく読み易い作品が多くなった様な気がします。とんだ子ども達の作品、枠に捕らわれず自由で奔放な発想に基づく作品が多く驚かされます。

色紙展は老若男女誰にでも優しく、楽しい展示会を目指しています。さあぁ、身近な言葉でも書いてみましょう、額に入れてみると、立派な作品の完成です。

自由奔放に　子どもの書の色紙展

齋藤湖舟氏へ　名誉市民称号贈呈

村山市書道会会長であり、村山市芸術文化協議会顧問の齋藤湖舟氏へ市制施行七十周年記念式典で名誉市民称号が贈呈されました。

齋藤湖舟氏は岩崎潮風氏の後を継ぎ、氏の創設した創琢書道会の二代目会長として平成八年より務めています。自身の作品制作に取り組みながら、書道教室や練成会を開くなど、後進の育成指導に貢献しています。また、毎日書道展の審査員をはじめとする様々な役員等を務めるとともに、県書道連盟の副会長として普及活動に力を入れています。また、浅草寺に十年毎に奉納する「大わらじ」への揮毫（きごう）も担うなど、書の向上や普及に広く大きく貢献されている人物です。

贈呈を受けた湖舟氏は、関係各所の皆様へ感謝を述べられつつ、尚一層の精進を熱く話されていました。

（村山市書道会　青柳　孝雄）

注目！　むらやま少年少女合唱団

はじめまして。むらやま少年少女合唱団です。令和六年五月設立、団員募集を経て十月から活動が始まりました。現在、団員は五名。中学生、高校生、大学生というとてもフレッシュなメンバーです。

村山市では、さまざまな合唱団が合唱活動を行っていますが、中学生や高校生等が中心となって合唱を楽しむ場はありませんでした。近年の部活動地域移行に伴い、学校を超えて活動する中高生等を対象にした合唱団を立ち上げました。この合唱団での活動を通して、歌うことや仲間と声を合わせて合唱することの楽しさを味わって欲しいと願っています。

今、美しいハーモニーが響くように練習を積んでいるところです。地域の皆さんの前で演奏できる場を探しています。是非、お声がけください。

（むらやま少年少女合唱団　細梅　睦子）

令和六年度　村山市芸文協のうごき

- 4・9　会計監査
- 4・22　三役幹事会
- 5・2　理事会
- 5・10　県芸文協常任理事会
- 5・23　総会
- 5・25　県芸文協会総会
- 5・26　山形交響楽団　ユアタウンコンサート村山公演（後援）
- 7・24　市町村芸術文化団体会長会議
- 8・31　三役幹事会
- 9・6～10・15　最上川展～小松均・真下慶治が愛した母なる川～（シンボル事業）
- 9・27　三役幹事会
- 10・3　芸術文化功労者選考委員会
- 10・16　県美展こども県展村山巡回展
- 10・25　村山市芸術祭開幕式・功労者表彰式
- 11・16　バリアフリーのびのび文化教室（日本舞踊）
- 11・30　バリアフリーのびのび文化教室（演劇）
- 12・1　第九演奏会（シンボル事業）
- 12・17　芸文だより編集委員会
- 12・20　北村山地区芸文協地域懇談会
- 1・28　芸文だより編集委員会

あとがき

今年の芸術祭は節目の六十回を迎えました。

各団体とも、工夫を凝らすのに大変だったと思います。数カ月に渡る稽古、段取り、練習、準備、創作など、流石に発表会、展示会は素晴らしいものでした。

原稿、写真等、お願いされた皆様方、丁寧にまとめられた格調高い原稿、構図のいきとどいた美しい写真、誠にありがとうございました。仕上がりはいかがでしょうか。

新規加入者の激減を心配する団体が少なくありませんが、若いものに負けてもかまいません、マイペースで頑張りましょう。

（編集委員長　青柳　孝雄）

芸文だより編集委員

青柳　孝雄（村山市書道会）
佐藤　栄一（村山市社会音楽連盟）
後藤　敬子（村山市大正琴連盟）
加藤　博行（杉島諏訪太鼓保存会）
倉金　徳嗣（村山エッセイクラブ）